

ポスターセッション (P-水環境-1 ~ P-水環境-16)

P-水環境-1 ~ P-水環境-6 は、各地における河川や湧水水質に関わる発表であり、対象水質項目は主要無機イオン、化学物質、硝酸態窒素など多岐にわたっている。主要無機イオンについては、福井県嶺北地方の表層地質と湧水水質との関係が調査されている(P-水環境-1)。化学物質関係では、神奈川県金目川水系における農薬の実態と水生生物に対する閾値を評価したもの(P-水環境-2)、新潟県内の2河川と下水処理場の N,N-ジメチルホルムアミド(DMF)の濃度が下水処理工程で減少しないことを示したものの(P-水環境-4)、非イオン界面活性剤アルコールエトキシレートの環境暴露濃度の推定方法の開発と推定結果をまとめたもの(P-水環境-5)、および千葉市内の主要な5河川におけるノニルフェノール等の内分泌攪乱物質の恒常的な汚染実態が明らかしたものなど(P-水環境-6)の多彩な発表が行われた。また、多摩丘陵の生田緑地における“谷戸”の湧水実態調査結果から、硝酸態窒素濃度範囲が $<0.05 \sim 4.55 \text{mg/L}$ と大きくばらついていることが明らかにされた(P-水環境-3)。

P-水環境-7 ~ P-水環境-16 は、湖沼および海域に関わる発表であった。猪苗代湖において実施された自航式水中テレビロボットによる湖底の観察結果(P-水環境-7)や、リモートセンシング手法における Chl-a の推定に及ぼす無機懸濁物の影響に関する室内実験により、使用可能な反射率の波長帯とアオコ形成プランクトンの種類判別の可能性について検討がされた(P-水環境-8)。海域関係では、航走式表層水質測定装置による東京湾の広範囲の水質分布調査結果を使い、面的にビジュアル化して発表がされたが(P-水環境-9)、リモートセンシング手法との併用などの成果も期待できそうである。英虞湾について、藻場の海藻によるフェノール、LAS、E2 の分解性と大腸菌生育抑制実験(P-水環境-10)が行われ、英虞湾全域の干潟面積を航空機搭載のマルチスペクトラルスキャナにより推定すると 68%の干潟が消出したことが明らかにされた(P-水環境-12)。PAHs に関しては、干潟底質中に存在する室内実験における紫外線照射によりジヒドロキシピレンの生成の報告や(P-水環境-11)、ナホトカ号によるオイル流出事故により漂着したオイルスピルや海岸土壌中の PAHs の消長についての発表(P-水環境-16)があった。また、広島湾北部沿岸におけるイルガロール等3種の代替船底防汚剤の汚染実態が示された(P-水環境-13)。この他、干潟生態系再現分析装置による感潮域における底質の巻き上げの検討(P-水環境-15)や、底質改善技術として開発された硝酸カルシウム錠剤散布による改善効果の検討結果の発表が行われた(P-水環境-14)。

(兵庫県立健康環境科学研究所 - 駒井 幸雄)